新・要抄枕草子

目次

解説……四

第一部

一　春はあけぼの……〔一段〕……六
二　五月ばかりなどに……〔二百二十三段〕……八
三　賀茂へ参る道に……〔二百二十六段〕……一〇
四　八月つごもり……〔二百二十七段〕……一三

〔図〕

五　鳥　は……〔四十一段〕……一四
〔一〕鳥は、異所のものなれど……一四
〔二〕うぐひすは、文などにも……一六
〔三〕ほととぎすは、なほさらに……一八
六　虫　は……〔四十三段〕……一九
七　雪　は……〔二百五十一段〕……二
八　ありがたきもの……〔七十五段〕……二三
九　うつくしきもの……〔百五十一段〕……二四

〔図〕

十　無名といふ琵琶の御琴を……〔九十三段〕……二六
十一　中納言参り給ひて……〔百二段〕……二八
十二　大蔵卿ばかり……〔二百七十五段〕……三〇
十三　雪のいと高う降りたるを……〔二百九十九段〕……三三

第二部

十四　九月ばかり……〔百三十段〕……三四
十五　雪の、いと高うはあらで……〔百八十一段〕……三六
十六　世の中になほいと心うきもの……〔二百六十七段〕……三八
十七　日のいとうららかなるに……〔三百六段〕……四〇
〔一〕日のいとうららかなるに……四〇
〔二〕思へば、舟に乗りてありく人ばかり……四一
〔三〕小舟を見やるこそいみじけれ……四三
〔四〕海はなほいとゆゆしと思ふに……四四

〔図〕

十八　すさまじきもの……〔二十五段〕……四六
〔一〕すさまじきもの……四六
〔二〕また、必ず来べき人の……四八
〔三〕験者の物の怪調ずとて……五〇
〔四〕除目につかさ得ぬ人の家……五二
十九　憎きもの……〔二十八段〕……五四
〔一〕憎きもの……五四
〔二〕ものうらやみし……五六
〔三〕ねぶたしと思ひて臥したるに……五八
二十　木の花は……〔三十七段〕……六〇
〔一〕木の花は、濃きも薄きも……六〇
〔二〕梨の花、よにすさまじきものにして……六二

〔図〕

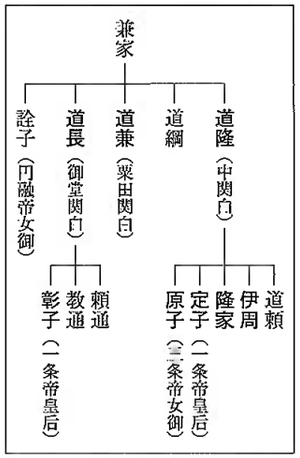
二十一　御方々・君達・上人など……〔百一段〕……六四
二十二　二月つごもりごろに……〔百六段〕……六六
二十三　五月ばかり、月もなう……〔百三十七段〕……六八
二十四　御乳母の大輔の命婦……〔二百四十段〕……七一

解説

一　時代

清少納言が一条天皇の中宮定子に宮仕えしたのは、九九三年のことで、定子十七歳、清少納言は二十八歳くらいであった。定子は中関白藤原道隆の娘で、当時この一家は全盛時代であった。すなわち、父道隆の勢力を背景として、九九四年には、わずか二十一歳の伊周は内大臣に昇進、十六歳の隆家は従三位左中将に進み、また九九五年正月には、次女原子が東宮（後の一条天皇）の女御として入内した。

しかしこの年四月の道隆の死（四十三歳）で、中関白家の運命は一変した。関白の地位は弟道兼へ移り、さらに弟道長へと移った。こうして伊周・隆家の一家と御堂関白家との対立は激しくなり、ついに、伊周らの花山法皇に対する暴射事件（九九六年）がきっかけとなって、伊周は九州に、隆家は出雲に左遷されて、中関白家は没落した。この時定子は二十一歳であった。三年後、道長の娘彰子が一条天皇の女御として入内した。道長の外戚政策の第一着手であるが、定子にとっては痛ましいことであった。定子はこのころから、実直だが身分は低い平生昌の邸（三条の宮、竹三条、と呼ばれる）に身を寄せて明け暮れすることが多くなり、ついに、一〇〇〇年生昌の邸で媄子内親王出産後二十五歳の短い生涯を閉じた。



藤原氏系図

二　作者

清少納言の父は清原元輔、曾祖父は同深養父である。深養父は『古今和歌集』時代の歌人、元輔は『後撰和歌集』の撰者で、いわゆる梨壺の五人のひとりである。肥後守を最後として八十三歳で亡くなっているから、受領階級に属する家系であるが、学者・芸術家としての天分は豊かに流れ伝わっていた。元輔の性格については『今昔物語集』に「馴者のものをかしく言ひて人笑はするを役とする翁」とあり、その明るい好笑家的性格は、清少納言にも伝わっている。

清少納言の生没年は不明だが、九六六年ごろの生まれで、六十歳前後で没したらしい。十六歳ごろ橘則光と結婚、一子を得たが後に離婚した。（ただし、離婚後も親交があったことは、八十二段の記事で知られる。）父に死別後、中宮定子のもとに宮仕えに出たが、その崩御の後は辞したらしく、宮仕えの期間は九九三―一〇〇〇年（または、その翌年あたり）と考えてよい。紫式部が彰子に仕えたのは、その辞任後数年してからであった。

清少納言（枕草子絵巻）

三　成立・書名

『枕草子』が書き上げられたのは、記事の内容から見て普通一〇〇〇年のこととされている。すなわち定子の崩御した年である。しかし、最終段の跋文めいた記事によると、すでに九九六年夏に、「つれづれなる里居（私宅生活）のほどに書き集め」たこと、それが源経房に持ち出されて流布するようになったこと、が知られる。したがって、まず第一次草稿本（九九六年）・第二次草稿本（一〇〇〇年）の成立が考えられるが、現在の『枕草子』を見ると、さらに一〇〇〇年以後の加筆と認むべき部分もあるので、結局三段階の過程をへて今日見るような全体ができあがったと考えられる。そしてその最終稿の成立は、おそくも一〇二一年以前であろう。

『枕草子』というこの奇妙な書名の由来は、跋文に暗示されている。伊周から料紙の献上を受けた中宮が、清少納言に「これに何を書かまし。」と相談したところ、「枕にこそは、はべらめ。」と答えたので、中宮はその返事が気に入って料紙を作者に下賜なさったというのである。したがって、「枕にこそは……」が何を意味するかが問題になるのであるが、(1)「枕」を「座右に置いて離さぬもの」の意とし、備忘録または手控えのこととする説と、(2)「枕」を「枕言」「歌枕」などの枕と見て、題詞を集めたものと解する説などが比較的有力である。

四　内容

『枕草子』は長短さまざまの三百余段から成っており、その各段の内容も、自然観賞あり、人生的感想あり、経験談あり、また和歌的題材の手控えありで、多種多様であるが、しかしそれらを整理してみると、ほぼ次の三つに分類される。

(1)　分類の諸段
(2)　日記回想の諸段
(3)　随想の諸段

(1)はいわゆる「ものはづけ」の段で、「……は」または「……なるものは」という題詞をかかげて、それに類するものを列挙した段である。

(2)はおもに作者の宮廷生活における体験談・回想記である。

(3)は自然美や人生観などについての随想である。

ところで現在伝わる写本には、「堺本」・「前田家本」のように、右の(1)・(2)・(3)が整然と分かれている類纂本と、「能因本」・「三巻本」のように、雑然と入りまじっている雑纂本とがある。そのいずれが「原型」に近いかについては、説が分かれているが、雑纂形態を「原型」とする説が有力であると見てよかろう。

『枕草子』は、随筆文学の最古の作品であるとともに、後の『徒然草』と並んで、日本随筆文学の双璧を成すものである。『徒然草』が、激しく揺れる時代の中で約七十年の生を生きた兼好の、内省的・思索的・知性的・求道的作品であるのに対して、これは、おおかたは平安な宮廷生活の中に生きた三十代の一女性の、感覚的・唯美的・情趣的な作品であり、浪漫性・青春性の満ちあふれた永遠の詩的散文である。

第一部

一　春はあけぼの

〔一段〕

春はあけぼの。やうやう*しろくなりゆく山ぎは少しあかりて、*紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、ほたるの多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。秋は夕ぐれ。夕日のさして、山のはいと近うなりたるに、烏の寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。まして、雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし。日入りはてて、風の音・虫の音など、はたいふべきにあらず。冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火など急ぎおこして、炭もてわたるもいとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も、白き灰がちになりてわろし。

5

しろく　「白く」とする説と、「著く」とする説がある。「紫だちたる」などとの照応を考えると、前説がよいと思われる。

紫だちたる　「紫」は古代紫。強い赤みを帯びた紫で、ほとんど濃赤色に近い。

月のころ　陰暦十日ごろから二十日ごろまでの、月のある時分をいう。

火桶　丸火鉢。

重要語句

○やうやう　○さらなり　○なほ
○をかし　○あはれなり　○まいて
○つとめて　○さらでも　○つきづきし
○ゆるびもていく

〔研究　A〕

一　次の各語の文中での意味として最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えよ。

(1)　やうやう（1）
　ア　ようやく　イ　しだいに　ウ　そろそろと
　エ　どんどん

(2)　つとめて（6）
　ア　気を配って　イ　翌朝　ウ　努力して　エ　早朝

(3)　つきづきし（8）
　ア　似つかわしい　イ　優美である　ウ　おもしろい
　エ　活動的である

(1)
(2)
(3)

二　「火桶の火も、白き灰がちになりてわろし」（8）とあるが、どうして「わろし」なのか。最も適当なものを次の中から選び、

記号で答えよ。
　ア　火力が弱くなって暖房の役に立たないから。
　イ　雑用をする女房たちの気配りが感じられないから。
　ウ　冬のいちばん冬らしい趣がなくなってしまうから。
　エ　色彩美が失われて情趣が感じられなくなるから。

三　「雁などのつらねたるが」（5）の「の」と「が」の文法的説明として最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えよ。
　ア　主格を示す格助詞　イ　連体格を示す格助詞
　ウ　同格を示す格助詞　エ　順接の接続助詞
　オ　逆接の接続助詞

A
B

〔研究　B〕

一　「春はあけぼの」（1）の解釈については種々の考え方があるが、有力な考えとしては、(1)「春はあけぼのなり」の意味と解するものと、(2)「春はあけぼのをかし」の意味と解するものとがある。口語訳するとそれぞれどのような訳となるか。

(2)	(1)

二　次の語句を口語に訳せ。
　(1)　月のころはさらなり（2）
　(2)　はたいふべきにあらず（6）

(2)	(1)

三　「さらでも」（7）は何を受けてそう言ったのか。説明せよ。

四　この文章では、一日の時間的経過の区分を示す語が多用されており、「あけぼの」→「つとめて」→「昼」→「夕ぐれ」→「夜」の順となるが、夜の部分をさらに細分した(1)「宵」、(2)「夜中・夜半」、(3)「暁」などの語もある。それぞれについてその時間帯を説明せよ。

(3)	(2)	(1)

二　五月ばかりなどに

五月ばかりなどに山里にありく、いとをかし。草葉も水もいと青く見えわたりたるに、上はつれなくて草生ひ茂りたるを、ながながとただざまに行けば、下はえならざりける水の、深くはあらねど、人などのあゆむにはしりあがりたる、いとをかし。左右にある垣にある、ものの枝などの、車の屋形などにさし入るを、急ぎてとらへて折らむとするほどに、ふと過ぎてはづれたるこそ、いと口惜しけれ。よもぎの、車におしひしがれたりけるが、輪の回り

（二百二十三段）

上はつれなくて・下はえならざりける　『拾遺和歌集』恋四の「芦根はふ泥は上こそつれなけれ下はえならず思ふ心を」（詠み人知らず）による。

ただざまに　「直様に」で、まっすぐに、の意。

車の屋形　牛車の車箱。人の乗っている部分。

かかりたる　「かかへたる」の誤写であろう。香りがあたりにただよった、の意。

重要語句

○五月ばかり　○見えわたる
○つれなし　○えならず
○折らむとするほどに

たるに、近ううちかかりたるもをかし。

〔研究　A〕

一　「つれなくて」(2) の文中での意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア　なにごともない様子で　　イ　薄情な様子で
ウ　情けない様子で　　エ　殺風景な様子で

□

二　次の傍線を施した部分の主語として適当なものを後の語群からそれぞれ選び、記号で答えよ。

A急ぎてとらへて折らむとするほどに、Bふと過ぎてCはづれたるこそ、いと口惜しけれ (4)

ア　作者　　イ　作者の従者　　ウ　車　　エ　木の枝

三　この文章は感覚的描写に優れているとされるが、次の中のどの感覚にかかわる描写に優れていると考えられるか。適当なものを三つ選んで、記号で答えよ。

ア　視覚　　イ　触覚　　ウ　味覚　　エ　聴覚　　オ　嗅覚

A
B
C

四　「五月ばかりなど」(1) の「ばかり」と「など」は共に副助詞であるが、意味の違いがある。それぞれ文中ではどのような意味を表しているか。適当なものを選び、記号で答えよ。

(1)　ばかり　　ア　程度や範囲　　イ　限定

(2)　など　　ア　例示　　イ　引用の語句を受ける
ウ　軽蔑・卑下などの意を強める
エ　婉曲　　オ　複数を表す

(1)
(2)

〔研究　B〕

一　「五月」(1) 以外の月の陰暦の名称を調べて書け。

一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月

二　「山里にありく」(1) と「人などのあゆむ」(3) の「ありく」と「あゆむ」の意味についてそれぞれ説明せよ。

A	B

三　作者はどこに身を置いているか。また、「人などのあゆむ」(3) の「人」は、作者とどういう関係にある人か。説明せよ。

四　次の語句を口語に訳せ。
よもぎの、車におしひしがれたりけるが、輪の回りたるに、近ううちかかりたるもをかし (5)

五　「急ぎてとらへて折らむとするほどに、ふと過ぎてはづれたるこそ」(4) の傍線部分（ア～オ）の動詞の活用の種類と活用形を記せ。

ア	イ	ウ	エ	オ
行　活用	行　活用	行　活用	行　活用	行　活用
形	形	形	形	形